

文要素配列に関する一考察

飯 島 周

1. 各自然言語について、そのタイプ分類の主要な基準のひとつとして、その言語における文中の各要素の標準的配列、すなわち語順をあげることができる。この場合、語順を説明するために、おもに行われて来たのは、文法上の機能を中心にした考え方である。つまり、文を構成する要素のグループを、まず主部と述部にわけ、さらにその両グループ内の要素を、主語(S)、動詞(V)、目的語(O)などと命名し、それらの配列順位を示す方法である。これらの命名が各自然言語について妥当かどうか、又はこれらの要素が普遍的なものかどうかという問題を別にすれば、この方法は、わかりやすく便利である。たとえば、J.H. Greenberg は、この方法から出発して、the Basic Order Typology を提案し、世界各地にまたがる30の言語について、それぞれの語順を、3種の基本的タイプ（(I. VSO, II. SVO, III. SOV)）に分類し、これを基準にして、いくつかの普遍的法則を設立しようと試みている。^①（この分類によれば、日本語はIIIのSOVタイプに属するが、それについての異論は、ほとんどないであろう。）ただし、この分類は、いわば抽象的に法則化した標準的文要素配列によるものである。^②現実の発話においては、各要素の順位変更、省略などが数多く生ずるのはいうまでもない。いいかえれば、文法的規制の強い標準的語順と、伝達を主眼とする機能的語順とは、必ずしも一致しない。この点で、両者のちがいは何によって生ずるのか、どのように説明し得るかという問題が与えられる。以下、この問

題を中心に、語順が持つ機能の一部のスケッチを試みたい。

2. 語順の決定は、もちろん形態論的にも無視できぬ要件を持つが、主として統語論的に処理される。ところが F. Daneš によれば、現在、統語論上の問題をあつかうのに、レベルの混同がみられるという。Daneš は、この点で N. Chomsky を批判しているが、Daneš の考えるレベルとは、次の3段階である。^③

I. 文の意味的構造のレベル

(以下SLと略)

II. 文の文法的構造のレベル

(以下GLと略)

III. 発話構成のレベル (以下ULと略)

その解説を要約すれば、SLとは、意味的(論理的)構造であり、actor-action などの意味的(論理的)関係を、抽象的な単語カテゴリーおよびそれらのカテゴリーの関係という形で示すものである。それらの関係は、言語外的(extra-linguistic)な論理的なもので、その意味においては普遍的であるが、それぞれの言語において、言語的にはことなる形式により、ことなる深さ広さで表示される。これらを、文法的カテゴリーと混同してはならない。

GLは、SLとは直接には一致しないレベルで、中心におかれるものは、主語、述語などの文法的関係である。集約的には、直接結びつくコンテキスト(又はディスコース)を持たない(抽象的な)文型(Sentence Pattern)として示される。

最後のULは、具体的な発話を構成するた

めに、その各要素を線条的に配列するレベルである。ここでは、SLおよびGLにおいて分析される意味的構造や文法的構造が、伝達(Communication)行為そのものの中で、どのような機能をはたすかが理解できるようになる。この行為に影響を与えるものは、コンテキストや本来の言語的要素以外にも数多く、話し手と聞き手の関係のような、社会的心理的条件まで含んでいる。そのため、ULは、他のレベルに比して、具体的かつ動的であり、いわば一時的、特殊である。これに対し、SLとGLは、抽象的かつ静的な体系で、恒常的、標準的である。

上述の見解をさらに補説すれば、SLとGL、特に後者は、F. d. Saussure 的なラングの体系に近く、ULはパロール的なものを含んでいる。さらに、SLとGLは、生成文法における意味部門と統語部門(又は深層構造)、ULは音形部門(又は表面構造)に関連するといえる。しかし、この3レベル、SL-GL-ULによるアプローチの最大の特色は、それが伝達の機能に重点をおくことである。その点で、この方法は、語順の分析にかなりの有効性を持つと思われるので、以下その線によって論を進める。

3. 語順の問題は、同時に文(Sentence)の問題でもある。‘文’の概念は、簡単に規定し難いが、ここでは便宜的に「ある言語において、最小の伝達単位として認められ得る単語の連続(又は単語)」と定義しておく。これは、各自然言語の正常な話し手(聞き手)なら、ほとんど問題なく認定し得る単位であろう。^④この単位は、具体的な発話行為の中から抽象されるもので、分析的思考の対象となり得るものである。もちろん、そのすべてが‘文法的に’完全なものとは限らず、又、非文法的とまで行かなくても、非標準的な場合もある。その基準は、言語によってことなるが、それを語順の点にしぼって、実例を検討しよう。

前述の如く、文の各要素の標準的配列には、各言語の基本的タイプが反映される。たとえ

ば、(1)と(2)は、ほぼ同一の意味構造であると認められるが、ふつうの場合、(1)は日本語、(2)は英語の標準的語順を示す。(本来ならば、当然イントネーションを考慮すべきであるが、ここでは単純化のために、あえてイントネーションによる標識を度外視する。)

(1) かれは おもしろい本を 書いた。

(S O V)

(2) He wrote an interesting book.

(S V O)

つまり、日本語はSOVタイプ、英語はSVOタイプである。しかし、実際の発話においては、両言語における語順の自由度(又は規範性)は、かなりちがっている。たとえば、(2)の語順変更の可能性としては、例外的に(3)の形ぐらいしか考えられないであろう。

(3) An interesting book he wrote.

(O S V)

一方、(1)は、機械的に考えた場合、(4)~(8)の可能性がある。

(4) かれは 書いた おもしろい本を。

(S V O)

(5) おもしろい本を かれは 書いた。

(O S V)

(6) おもしろい本を 書いた かれは。

(O V S)

(7) 書いた かれは おもしろい本を。

(V S O)

(8) 書いた おもしろい本を かれは。

(V O S)

(4)~(8)のそれぞれについて、検討すると、その文法的認容度がことなるといえる。日本語の native speaker としての筆者の直観では、日本語としてまったく正常と判定できる、すなわち認容度100パーセントなのは(5)のみであるが、(4)の認容度もかなり高い。(6)、(7)、(8)は、それがずっと低くなり、認容度ゼロ、すなわち日本語の文として成立しないと判定される可能性もある。結局、この場合考え得る6種の語順(SOV, SVO, OSV, OVS, VSO, VOS)のうち、SがVに先行するものは日本語として文法的認容度が高

く、VがSに先行するものは低いといえる。^⑥

上記の例を、さらに前述の各レベル(SL, GL, UL)について考えてみる。まず、(1)と(4)~(8)のそれぞれは、同一の意味的要素を持ち、各要素間の意味的(論理的)関係は変わらない。したがって、SLにおいては、(1)と(4)~(8)は、その要素配列の物理的順序の差を除けば同一であると認められる。GLにおいても、(1)と(5)は結局同タイプの文になり、文法的認容度が問題になるが、これは前述のように語順を除いては差がない。そして、(1)と(5)が、日本語としてまったく正常であるとすれば、その点では差がつけられない。つまり、(1)と(5)は、SLとGLにおいては同一であるといえる。しかし、(1)と(5)は、語順がことになっており、この事実は、残るレベル、すなわちULにおいて、両者の間に何等かの差があることを示すはずである。そして実際に、われわれは両者の相違を感じず。それでは、この相違は何によって生ずるのか。その分析には、SLとGLに直接関係しないUL独自の単位の設定が必要だと推論される。

4. 現実の発話における語順を決定する要素は実に複雑である。これを単純化するのは困難であるが、語順の説明に時に利用されるものとしては、伝達上の主題および注釈(又はこれらに類似する概念および用語)がある。これらは、文法上の関係を示す用語でもないし、意味的又は論理的なカテゴリーにも直接関係しない。

一部の言語学者^⑥は、上記の概念をあらゆる用語として、Topic-Commentを用いる。この両者の関係は、文法(又は論理)上の主語と述語との関係とは必ずしも一致しない。^⑦たとえば、C. Hockettは、次のような例をあげている。^⑧

(9) *That new book by Thomas Guernsey*
/ *I haven't read yet.*

Hockettの説明によれば、上文で、斜線の前(すなわち *That...Guernsey*)はこの文のTopicではあるが主語(Subject)ではなく、動詞(Verb) *haven't read (yet)*の目的

語(Object)である。そして、主語である *I* は、文全体のCommentの一部となっている。すなわち、(9)は、次のように分析される。

(10) Topic / Comment
(O / SV)

したがって、この分析法には、SLおよびGLとは直接に関連しない要素があり、それはUL独自のものと考えてよいであろう。この種の考え方は、ヨーロッパでは、かなり古くから存在したが、近代になって、より明確に組織化したのは、いわゆるプラハ言語学派である。この学派の創設者のひとりであり、この派を代表する機能言語学(Functional Linguistics)の提唱者であるV. Mathesius(1882—1945)は、すでに1939年に発表された論文^⑨で、この問題についての注目すべき主張をしている。

Mathesiusによれば、ある文について、その形式的(文法的)文要素配列(以下GSPと略)と、現実的(機能的)文要素配列(以下FSPと略)^⑩を対比させて考える必要がある。すなわち、GSPの基本的要素は、文法上の主語と述語であるが、FSPの基本的要素は、ある叙述の出発点又は基礎(すなわち、叙述の行われている場で知られているもの、又は容易に了解されるもので、話し手が説明しようとするもの)と、叙述の核心(すなわち、叙述の出発点そのもの又は関連事項についての、話し手の説明の中心)である。^⑪ GSPとFSPとの関係は、各言語における最も特徴的なもののひとつである。なぜなら、GSPは恒常的なものであるのに、FSPは一時的であり、ある文についての両者の食い違いを解決する方法が、各言語によってことなるからである。たとえば、チェコ語では、主として語順によって解決可能である。これは、チェコ語がいわゆる総合的(synthetic)タイプの言語であり、各要素間の関係が形態論的に明示されているために、語順の自由度がかなり高いからである。これに反し、たとえば、英語の語順は固定的であるため、英語では別の手段(たとえば受動態など)によっ

て調整しようとする。^⑫

上述の考え方は、その後次第に深められて現在におよんでいる。基本的な方向については Mathesius 以来大きな変化がないが、部分的な修正や、新しい概念と用語の導入によって、一層整備されて来た。現在もなお研究が進められているが、以下その要約を記す。^⑬

この理論の基本的仮定は、次のようにあらわされる。すなわち、人間の思考の性格および文の線条性と一致するように、文の諸要素は、それぞれの持つ伝達の動力性 (Communicative Dynamism, 以下CDと略) の程度に従って配列される。(CDとは、文中のある要素が、伝達の展開においてはたす役割の程度であり、いわば、伝達を 'push forward' する力である。) その基本的配分は、CDが最低のものから次第に高度なものへと進み、文末に最高のCDを持つ要素がおかれるという順序である。^⑭

CDが最低のもの(たとえば、先行する文中に含まれる要素)をテーマ (Theme, 以下Tと略)、CDが最高のものをレーマ (Rheme, 以下Rと略)と呼ぶが、両者の中間にある要素 (Transition,^⑮ 以下tと略)も存在する。したがって、CDの基本的配分は、T-t-Rとなる。たとえば、次のような分析ができる。

- (11) Mr Brown has turned out an excellent teacher.
(T t R)

CDの基本的配分は、各言語の文法的構造、情緒的原因、リズムその他の理由により変化(又は逸脱)し得る。しかし、その変化(又は逸脱)は、コンテキストや文の意味的構造によって示され得るので、逆にCDの基本的配分の存在を実証することになる。たとえば、

- (12) He wanted to please Mary.

の Mary は、基本的にはRであるが、コンテキストによってはTにもなり得る。又、文の意味的構造から考えて、コンテキストに影響されない文(たとえば、ディスコースの先

頭に来るものなど)では、主語が知られていれば、行為を示す動詞よりも行為の対象の方がCDが高い。たとえば、

- (13) He wrote an interesting book.
(14) Er hat ein interessantes Buch geschrieben.

では、an interesting book および ein interessantes Buch が、それぞれRとなる。

コンテキストや意味的構造の作用は、CDの基本的配分の方向に逆行する場合に一番明白になるが、もちろん順行することも多い。したがって、FSPは、CDの基本的配分と、コンテキストおよび文の意味的構造との間の相互作用(又は緊張)の産物である。結論的には、SLの領域にある意味的構造およびGLの領域にある文法的構造が、実際の伝達行為の中でどのようにはたらくかをよく理解できるようにするのがFSPの理論、すなわちULの分析である。

5. FSPの理論は、チェコ語を中心にしたいくつかのヨーロッパ語に適用されて、ある程度の成果をあげている。そこで、日本語の場合にはどのように分析されるか、その点を考察する。

まず、コンテキストからの独立性が比較的高い、標準的な日本語の文である(1)と(5)について、CDの配分を試みると、平均的には次のようになるであろう。

- (15) かれは おもしろい本を 書いた。
(T R t)
(16) おもしろい本を かれは 書いた。
(R T t)

‘かれ’という人物が、話し手と聞き手にわかっているとすれば、(1)および(5)に対する反応もある程度推測できる。その反応を疑問の形であらわせば、おそらく「どんな本を？」がふつうであろう。「どんな風に？」とか「どんなやり方で？」も考え得るが、その場合にはRは移動することになる。ただし、(16)は、‘かれ’がRになる場合も考えられる。つまり、(16)は、T-R-tとなる可能性が十分にある。これに関することを、さらに別の例で

確認しておこう。たとえば、J. Firbas のあげている例がその参考になろう。^⑩ (17)のチェコ語の文と(18)の英語の文はほぼ同じ意味である。

- (17) V pokoji seděl starý muž.
(T t R)
(18) There was an old man sitting
(O R t
in the room.
T)

(18)の中で、OはCDの立場からゼロに近いものである。存在、出現などをあらわす自動詞 (to be, to appear など) は、これに類する。^⑪

(17)と(18)は、語順がことなり、CDの配列はことなるが、ほぼ同じ伝達効果を持つ。これらに相当する日本語の文は、次のようになるであろう。

- (19) (その)部屋の中に (ひとりの)老人が
(A B
すわっていた。
C)

これに対し、(19)と同じ意味に解され、しかも日本語としてより標準的な次の文は、(19)とはことなる効果を持ち得る。

- (20) (ひとりの)老人が (その)部屋の中に
(B A
すわっていた。
C)

つまり、(19)に対する反応は、「どんな老人(が)?」が通例であると思われるのに、(20)に対する反応は、「どんな部屋(に)?」となり得るからである。いいかえれば、(19)では、BがRになり、(20)ではAがRになる可能性が大きい。この場合CDの配分を示せば、(19)(20)とも、T-R-tとなる。すなわち、「CDの基本的配分は、ヨーロッパ語^⑫がT-t-Rであるのに対し、日本語ではT-R-tとなる」という仮説を立てることができよう。

以下、この仮説によって、日本語の伝達における特性に2, 3検討を加えたい。

6. すでに3.で述べたように、日本語の語順

は英語などに比して自由度が高い。しかし、この自由度の高さは(ラテン語やチェコ語のように)形態的な構造(又は屈折語尾)によって支えられているのではなく、コンテキストに対する依存によるのである。もちろん、コンテキストに対する依存のない言語は存在しないが、日本語のコンテキスト依存度の高さは注目すべきであろう。日本語では発話の語順は自由であっても、その発話全体がコンテキストに強く制約されている。つまり、コンテキストおよび状況が把握されるまでは、他の言語にくらべて、発言したり理解したりしにくい傾向がある。^⑬

さらに、日本語では、TとRの仲介となる部分(すなわち、日本語では通例文末におかれるt)が省略される傾向が強く、このため一層多義又は難解になる場合があることも指摘できる。

コンテキスト依存とtの省略による多義性の典型的な例としては、有名な次の文がある。

- (21) ぼくは うなぎだ。

FSP理論によってこの文を分析すれば、この文はULにおいてはT-Rの構造であるといえる。「だ」の叙述性^⑭が説かれることもあるが、これは「うなぎだ」全体をRとして処理することの障害にはならない。又、(21)がT-Rであることは、(21)と同じ多義性を持つ(22)が、かたこと的ではあるが成立し得ることからも説明できる。

- (22) ぼく うなぎ。

- (T R)

この形式の文は、tが明示されないため、コンテキスト又は状況なしではきわめて多義的であり、そのSLおよびGLにおける構造も、そのままでは決定できない。又、(21)を倒置した(23)においても、TとRの関係は変わらないと思われる。

- (23) うなぎだ ぼくは。

- (R T)

結局、この形式の文は、適当なコンテキスト又は状況と結びつかなければ、その意味が一義的には理解されないことになる。しかし、

実際に、日本語にはこの種の発話が多い。しかも、(正常な)日本語の使い手ならば、それらの意味がわからずに苦しむことは非常に少ないであろう。(ただし、誤解の可能性は多い。)少なくとも、次のような例は、ほとんど問題なく認められ得る。

(24) 男は度胸, 女は愛嬌。

(25) きのは京都, あすは東京。

これは、日本語の持つ、一種の柔軟性ともいべき不思議な性質である。しかし、このように、TとRの関係を一義的に決定するtを明示せずにおくことは、恣意的な解釈(又は多義的な理解)を生ずることになる。日本語の暗示的特性と表現できるであろう。

さらに、日本語の基本的CD配分がT-R-tであることは、あるテキストの発展の中でどのような影響を持つであろうか。比較のために、以下、Mathesiusの用いた例^②によって考察する。これは、あるおとぎ話の最初の部分である。(ただし、Oは、CDの点で中立的なものとする。)

(26) Byl jednou jeden král / a ten
 $T_1 \quad t_1 \quad R_1 \quad O \quad T_2$
měl tři syny. Nejstaršího z nich napadlo,
 $t_2 \quad R_2 \quad T_3 \quad t_3$
že si půjde do světa hledat nevěstu.
 R_3

(27) Once upon a time there was a king
 $T_1 \quad t_1 \quad R_1$
/ and he had three sons. The eldest
 $O \quad T_2 \quad t_2 \quad R_2 \quad T_3$
of them got an idea that he would
 $t_3 \quad R_3$
travel around the world to find himself
a bride.

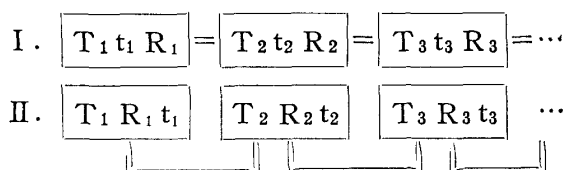
(28) むかし (ひとりの)王さまが いました
 $T_1 \quad R_1 \quad t_1$
た。/そして (その)王さまは 3人のむ
 $O \quad T_2 \quad R_2$
すこを 持っていました。 一番年うえの
 $t_2 \quad T_3$

むすこは お嫁さんをさがしに旅に出よう
 R_3

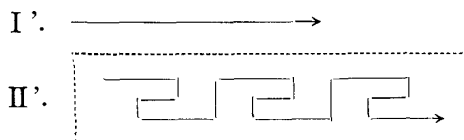
と思いつきました。

t_3

上記の例は、典型的なCDの配分を示すと思われるが、これを補足的に説明すると、(26)および(27)では直線的に進行し、(28)では蛇行しているのがわかる。図示すれば、(26)および(27)はI、(28)はIIとなる。



すなわち、(26)および(27)では、 R_1 がただちに T_2 と結びつき、 R_2 が T_3 と直結して行く。いいかえれば、前文のRがそのまま後文のTとなって伝達が進行する。これに反し、(28)では、 R_1 は t_1 をへだてて T_2 と結び、 R_2 は t_2 を越えて T_3 と連絡する。IとIIを極度に単純化すれば、I'とII'の線形が得られる。



この点を要約すると、日本語におけるtの配置は、文相互の連絡を複雑にする(又は阻害する)傾向があるといえる。日本語の実際の発話に途中打ち切り型が多いのは、このようなCDの配分に原因があるようにも思われる。いいかえれば、T・Rが先行するため、tは不要又は冗長であるという感じを与えがちなのである。

このように、tが最後に来ること^③は、文全体のCDを弱め、時には後続の文とのつながりを切ってしまう。よくいわれるように、日本語は伝達線上で左側にオープンであり、英語などは右側にオープンであることも、このCDの配分と関係があるであろう。^④しかし、このような問題、さらにこれらを根拠として、たとえば日本人の国民性や思考法までを論ずる^⑤ことは、残念ながら、この小論の射程をはるかに越えている。

7. 最後に、不備ではあるが、中間的なまとめとして、以下数点を列記しておく。

i. 統語論上の問題を考察する場合には、SL, GL, ULの区別が必要である。各レベルの単位および構造を混同してはならないが、ULを手がかりとして、SL, GLを推理することができる。

ii. FSP理論によれば、日本語とヨーロッパ語との間には、CDの基本的配分に差がみられる。すなわち、ヨーロッパ語では、T-t-R, 日本語ではT-R-tである。これは、両者のタイプの差と関連するであろう。

iii. 日本語における伝達の特性のいくつかは、上記CDの基本的配分で説明可能と思われる。たとえば、日本語の暗示性や、伝達の蛇行性など。又、翻訳における語順の問題などにも、この考え方が応用できる。

iv. FSP理論は、もちろん未完成であるが、伝達行為の分析について新しい展望を与えるものと期待される。

〔注〕

1. J. H. Greenberg (ed.): *Universals of Language*, Cambridge, Mass. 1963 p. 76 ff.

2. この点でも、周辺的なものと中心的なものとの別がある。たとえば、フランス語は、基本的にはSVOタイプであるが、そうでない形が標準となることもある。Je vous aime. など。なお、E. Sapir が、これとはことなる基準ではあるが、フランス語を英語などとなるタイプに(保留つきで)分類しているのは、興味ある事実である。E. Sapir: *Language*, New York 1921 p. 143

3. F. Daneš: 'A Three-Level Approach to Syntax', *Travaux linguistiques de Prague* (以下TLPと略) 1, Prague 1966 pp. 225—240 DanešのChomskyに対する批判は、かなり有力な根拠があると考えられる。

4. たとえば、国立国語研究所報告18「話しことばの文型(1)—対話資料による研究—」1960 pp. 42—85 参照。

5. Greenbergは、日本語はSOVタイプの

中で、Vを常に最後におく'rigid'なサブタイプに属するとしている。Greenberg, op. cit. p. 79

6. この中には、いわゆる変形生成文法派も多く含まれている。

7. N. Chomskyは、この点について次のように記しているが、引用文の後でこの方面への期待も述べている。It might be suggested that Topic-Comment is the basic grammatical relation of surface structure corresponding (roughly) to the fundamental Subject-Predicate relation of deep structure... Topic and Subject will coincide, but not in the examples discussed... N. Chomsky: *Aspects of the Theory of Syntax*, Cambridge, Mass. 1965 p. 221

8. C.F. Hockett: *A Course in Modern Linguistics*, New York 1958 p. 201

9. V. Mathesius: 'O tak zvaném aktuálním členění větném' (いわゆる現実的文要素配列について), *Slovo a slovesnost* 5, Praha 1939 pp. 171—174 *Čeština a obecný jazykozpyt*(チェコ語と一般言語学), Praha 1947 pp. 234—242 に再録。この理論は、実際には1920年代から考えられている。

10. それぞれの原語は、formální členění větné, aktuální členění větnéである。なお、後者の英訳形は何種類かあるが、Functional Sentence Perspective (FSP) が代表的である。

11. Mathesiusは、初期の用語としては、出発点(východiště)と核(jádro)を用いた(Mathesius, 注9のop. cit.)が、後に、基礎(základ)と核(jádro)に改めた。V. Mathesius: *Obsahový rozbor současné angličtiny na základě obecně lingvistickém* (一般言語学的基礎による現代英語の内容—機能一的分析), Praha 1961 p. 91 ff. 現在では、後述のthemeとrhemeが代表的命名である。

12. 英語では、実際に文法上の主語が、基礎(すなわちテーマ)になっている例が多い。

13. この要約は、主として下記の論文による。

J. Firbas: 'Non-Thematic Subjects in Contemporary English,' *TLP* 2, Prague 1966

14. この順序が、すべての言語に適用できるかどうか疑問である。後述のように、少なくとも日本語では成立しにくいと思われる。

15. *TLP* 2, p.240 TもRも、通例、連語としてあらわされる。なお、tは、筆者の考えではメディウム (Medium) とした方がよい。ただし、ここでは Firbasの用語に従う。

16. J. Firbas: 'On Defining the Theme in Functional Sentence Analysis,' *TLP* 1,, pp.267-280 中の例文 (p.274).

17. Ibid. p.275

18. この呼び名は便宜的なものであり、もっとよく検討すべきであろう。

19. R.Lakoff: 'Language in Context,' *Language*. Vol. 48 No. 4, Baltimore 1973 pp. 907-927 は、このような問題にとって示唆的である。

20. 「だ」は、終結 (又は打切り) を示す感じがある。この種の語は、しばしば重複的に用いられる。「だよ」「だわ」「だね」「だわよ」「だわよね」など。

21. Mathesius, 注9のop.cit.参照。

T-R 分析の方法については、下記参照。

F. Daneš: 'One Instance of Prague School Methodology: Functional Analysis of Utterance and Text,' P. L. Garvin (ed.): *Method and Theory in Linguistics*, The Hague 1970 pp.132-146

22. この事実は、日本語におけるひとつの特性とされる、いわゆる '文末決定性' と関連するかも知れない。

23. 簡単に図示すれば、次のようになる。

i. ……のようなおもしろい本を(かれは)書いた。(>)

ii. He wrote an interesting book which …… (<)

24. 実際に、日本人と他民族との発想法や思考形式の差を、言語構造の差と結びつける考え方は多い。その大部分は、日本語の欠陥を指摘するか、又は英語などとは正反対だという結論を出している。それらの中には、短絡的なものもあり、より組織的な研究が必要であろう。